

神奈川県看護教育フォーラム

多職種連携 ～看護基礎教育から臨床への発展～



日時

2025年 2月22日(土) 13:30～16:30

会場

神奈川県立よこはま看護学校 講堂

参加費無料

プログラム

- 開会式 会長挨拶 13:30～13:45
来賓挨拶
- 教員表彰 受賞者紹介 13:45～14:00
- 基調講演 テーマ：多職種連携の背景と今後の展望 14:05～14:55
《講師》小野寺 由美子 氏（医療生協さいたま生活協同組合 本部保健看護部次長）
《休憩》
- シンポジウム テーマ：多職種連携～看護基礎教育における教育の現状と今後の展望～ 15:05～16:25
《シンポジスト》
細洞 安基子 氏（藤沢市立看護専門学校 教務課長）
山内 亜由巳 氏（イムス横浜国際看護専門学校 教務主任）
田辺 幸子 氏（北里大学看護学部 准教授）
- 閉会式 16:25～16:30

第26回「神奈川県看護教育フォーラム」

目次

会長挨拶	3
神奈川県看護師等養成機関連絡協議会	
会長：岡本 明子	
基調講演	5
医療生協さいたま生活協同組合 本部保健看護部次長	
小野寺 由美子 氏	
シンポジウム	8
藤沢市立看護専門学校	
教務課長：細洞 安基子 氏	
イムス横浜国際看護専門学校	
教務主任：山内 亜由巳 氏	
北里大学看護学部	
准教授：田辺 幸子 氏	

神奈川県看護師等養成機関連絡協議会

会長 岡本 明子

神奈川県看護師等養成機関連絡協議会は、会員の皆様の教育に関してさまざまなサポートをしております。毎年、現時点での看護基礎教育における関心ごとをテーマに取り組んできました。ここ数年、オンラインで開催してきました神奈川県看護教育フォーラムですが、昨年、久しぶりに会場参加型で開催いたしました。久しぶりに会場で多くの方とディスカッションすることができ、充実した会になりました。

第26回「神奈川県看護教育フォーラム」のメインテーマは、「多職種連携～看護基礎教育から臨床への発展～」です。医療の質や安全性の向上及び高度化・複雑化に伴い、多種、多様なスタッフが各々の高い専門性を発揮する場が増えております。また、慢性疾患を抱えた高齢者が住み慣れた地域で、その人らしく生活するための地域連携ケアシステムを支えるためには、多職種が連携していく必要があります。それぞれの職種が質の高いケアを提供するための連携には、互いの職種を理解し尊重していくために、看護基礎教育の段階から学ぶ取り組みを模索していることと思います。

このたび、医療生協さいたま生活協同組合本部保健看護部次長の小野寺由美子先生には「多職種連携の背景と今後の展望」というテーマで基調講演をしていただきます。小野寺由美子先生は、看護基礎教育と臨地で連携しながら、多職種連携に取り組まれております。教育現場に携わる皆様にとって貴重な機会となると考えております。

シンポジウムでは、藤沢市立看護専門学校の細洞安基子先生、イムス横浜国際看護専門学校の山内亜由巳先生、北里大学看護学部の田辺幸子先生に、それぞれの学校での取り組みをお話しいただきます。3名の先生方の所属機関のもつ背景により、取り組み方に違いがあるのではないのでしょうか。大変大きなテーマですので、ディスカッションしながら取り組みを、共有したいと考えています。

多職種連携をしていく中で、最も重要なことは、それぞれの専門職の専門性が発揮されることです。今回の内容を持ち帰り、日ごろどのように取り組めば良いのか、それぞれのお立場で考えることができることを期待いたします。また、会場で多くの方とディスカッションしていただきたいです。是非とも多くの皆様にご参加いただきますよう、よろしく願いいたします。

最後になりましたが、開催に際して、ご協力いただきました神奈川県、神奈川県看護師等養成実習病院連絡協議会をはじめとする関係団体の皆様、実習施設の皆様、会員校の皆様に深く感謝申し上げます。

テーマ：多職種連携の背景と今後の展望

〈講師〉

医療生協さいたま生活協同組合 本部保健看護部次長
小野寺 由美子 氏

〈座長〉

慶應義塾大学看護医療学部 准教授
福井 里佳 氏

多職種連携の背景と今後の展望

医療生協さいたま生活協同組合

本部保健看護部次長 小野寺 由美子

保健医療福祉の現場での IPW (Interprofessional Work: 専門職連携実践) の必要性は広く理解されつつあります。この間の地域包括ケアシステムの構築は、子どもから高齢者までを対象として、まさに地域社会のシステム作りに発展してきています。そのプロセスの中で IPW は重要な基盤です。IPW とは、単なる多職種による援助活動とは異なり、専門職の相互作用しあう学習の上に成り立つ連携協働を意味しています。そして IPW 実践のための教育が IPE (Interprofessional Education: 専門職連携教育) であり、この2つは一体的に存在しています。また近年の働き方改革やタスクシフティング/シェアリングによるチーム医療の促進は、まさに IPW が目指す理念と合致していると感じています。

現任者を対象とした継続的 IPE の取り組み

私と IPW/IPE の出会いは、埼玉県立大学の地域基盤型 IPE です。埼玉県立大学では日本でも先駆けて 2006 年度から学部教育の中に IPW を学ぶことを目的とした IPE を意識したカリキュラム開発、導入が行われました。2010 年度から当時勤務していた埼玉協同病院でその IPE の施設ファシリテータとして関わり、これこそ臨床の現場に必要な視点であると強く認識しました。「現任教育にこそ IPE が重要かつ有効」という思いが募り、埼玉県立大学大学院に進学し、IPW/IPE について学びつつ、現任教育の IPE プログラム開発と導入を行いました。現在まで、形は少しずつ変化させながらも中堅職員を対象とした継続的な IPE に取り組んできています。

IPW は組織にとってのイノベーションです。IPE の効果を実感する一方で、専門職種間のヒエラルキー、コミュニケーション不足、患者・利用者不在の専門職本位の医療、縦割り組織、リーダーが連携したまらない、連携できていると思っているなど、現場には IPW を阻む要素は依然存在します。その中でイノベーションを起こすためにはどうしたらいいのか、自分のここまでの経験とも重ねてお伝えしたいと思います。

教育現場とのコラボレーションが現任者 IPE の鍵

保健医療福祉領域の各専門職教育コアカリキュラムや養成学校等指定規則に専門職連携(多職種連携)の学修が明記されたことで、多くの専門職養成学校・大学・大学院にて IPE が実施されるようになりました。私は大学院修了後の 2012 年度から、埼玉県立大学の非常勤講師として、IPW 実習教員ファシリテータ(以下 FT)の立場を経験すること

となりました。当時は IPW/IPE の社会的認知度はまだ低く、臨床で働いている職員が、IPW/IPE を体系的に学んできていることは皆無に近く、病院や施設で新しい実習を受け入れることへの現場の戸惑い、負担感が先行し、学生の IPE のフィールドとなる臨床現場の環境づくりが困難である現状にも対峙しました。そんな中タイミングよく、埼玉協同病院では前述の研修後であったため、院内の IPE に参加した職員に多学科学生チームの施設 FT の役割を担ってもらうことができました。施設 FT と教員 FT の両者を自ら体験できたことで、IPE を施設や地域で広く普及していくには教育現場と臨床現場の連携（これもまた IPW です）を強化させていくことが重要であると確信できました。基礎教育機関の IPE を受け入れることが、臨床現場の IPW を促進する機会や現場の IPE の機会と位置付け取り組んでいます。

今まで IPE を受講した職員に話を聞く中で最も印象的だったのは、“あなたにとってこの研修はどんな研修だったか”の問いかけに対し、“新鮮で、楽しい研修だった”と多くの職員が答えていたことでした。時間の経過とともに研修内容は少しずつ薄れていっても、多職種で楽しく学んだ研修であったことの記憶は鮮明で、これが IPE に対してのポジティブな感情につながっており、この連鎖が「IPW は楽しい！」という職場風土に結びついていくと感じています。そして IPW/IPE を推進する自分自身が“楽しむ”ことを忘れず取り組み続けたいと思っています。

まだ発展途上である自分自身の取り組みを通して、教育現場とのさらなる連携強化、IPE の地域展開の多様性や共通性、および方向性や考え方について皆さんとディスカッションすることが、神奈川県内での IPE の拡充や進化につながると期待しています。

テーマ：多職種連携

～看護基礎教育における教育の現状と今後の展望～

〈座長〉

慶應義塾大学看護医療学部

准教授：福井 里佳 氏

〈シンポジスト〉

藤沢市立看護専門学校

教務課長：細洞 安基子 氏

イムス横浜国際看護専門学校

教務主任：山内 亜由巳 氏

北里大学看護学部

准教授：田辺 幸子 氏

藤沢市立看護専門学校における「専門職連携教育」 ～協働する仲間を知ろう～

藤沢市立看護専門学校

教務課長 細洞 安基子

1. 「専門職連携教育」科目設置の背景

第5次保健師助産師看護師法指定規則改定にて、地域包括ケアシステム推進に向け看護職には「地域で多職種と協働する能力」が求められた。この先の医療提供体制として地域包括ケアシステムの推進については、各自治体も取り組んでいるところである。本校は自治体立の養成校として、地域に必要とされる人材育成を使命に運営している経緯があり、これから一層にその意識を持つ必要があると考えた。

本校は市内を中心に多様な施設より学習の場を提供していただき、地域の方々と共に、語り、その方々が直面していること、看護に期待していることを知る環境に恵まれている。社会の仕組みやそこで暮らす人をとらえる視点を大切に、社会福祉と医療および看護関係者の連携、協働のあり方について考える機会として、実際に多くの専門職の方々より学びを得てきた。そして今回、協働する素地の育成を期待し、学生の内から専門職種同士の理解を深め対話できることをねらいとして、3学年次の科目に「専門職連携教育」を設置した。

2. 科目「専門職連携教育」の構想と立ち上げ

この科目を考えたとき、先にあげた体験学習や実習に同行し実感したいくつかの出来事が思い出された。ある場面に遭遇した際の各専門職の対応と連携を見た学生の反応、医療系学生と看護学生の反応の相違など、看護の専門性についてあらためて考える機会であった。それらに教育的な関心をもち、お互いのもつ知識や価値観を共有し学ぶことの意義を感じていた。

多職種連携教育を行うしくみを作るため、本校は単科であることから「実習施設中心型」として構築することを考えた。医療系学生同士で、職種の専門性と協働のあり方について、共に意見を交わし学習することを主軸に据え、主たる実習施設である藤沢市民病院へ協力を求めた。病院として協力はするが、各学校との実習協定があるためその前提に反せず整えることとの見解があった。

そこで、実習生双方におけるメリット、実習に看護学生が同行することでの影響などを確認し、実習受け入れ責任者である各医療技術部門長に対し連携教育への共通認識を

図ることから始めた。実際の展開として「①各部門の実習時間に合わせ本校学生を1～2名ずつ配置すること②一日を共に過ごし、他の医療系学生の実習や資格取得に向けた学習を知ること③テーマを設定し各専門性の視点より事例の検討をする時間をもつこと」につき依頼をした。各部門長はこの取り組みを評価し、概ね対応できるという反応であった。中には「理学療法学生はまだ実習経験が少ない段階で、大腿骨骨折後の事例はイメージがついても脳梗塞後については難しそうだ」「栄養学科の学生は病院への就職を希望しない人もいるので看護学生と話し合う段階にあるか」といった気がかりもあった。当然のことだが病院実習であっても専門職種による差異が興味深かった。これらその後、実習依頼校へ多職種連携教育の一環として看護学生との交流を考えている旨を説明し賛同を得た。

その後、各部門の実習に合わせ、7部門に対して学生の配置を計画した。さらに具体的な展開については、部門毎に状況は異なり多くの調整を要した。この段階では、藤沢市民病院より人事交流で着任している教員がそれら部門の方々とこれまで協働した関係を活かし、学びの場の調整に尽力した。この科目は各医療技術部門の多大なる理解のもとに成立している。

3. 科目の実際

「専門職連携教育」は1単位15時間で構成した。科目のねらいは「医療チームの一員としての役割や他職種との協働について理解し、様々なライフステージ・健康レベルにある対象者の健康や生活を守る保健・医療・福祉の提供に向けて、お互いの職種の特性を活かし、対象の課題解決に向けてよりよい方法をともに考える力の習得を目指す」とした。内訳は準備段階に6時間を設定し、多職種連携の基本、チームワークや役割と責任、コミュニケーションについて学習する。さらに専門職の理解として、専門職として活動する方を講師に招き教育背景、職業経験、看護師に求めることについて講義を行う。医療系学生との交流は1日8時間で展開している。現在は2職種間での交流にとどまるが、実習に同行し学びの内容を知り、資格取得までの過程をインタビューし、1時間ほどをかけた事例検討をしている。

このように歩き出したばかりの科目であり学習を深化し発展するために課題はある。ただ、履修を終えた学生の反応からこの科目に取り組んでよかったと思えることが多くあり、科目設定した意義を感じている。

看護基礎教育から臨床へつながる他職種協働実習

イムス横浜国際看護専門学校

教務主任 山内 亜由巳

近年医療の高度化や複雑化、地域包括ケアシステムの構築により、保健医療福祉サービスに関わる様々な職種間の協働がますます重要となり、看護職に期待される能力は広範囲でさらに深くなっている。

看護では多様な場面で対応できる看護実践能力の強化、「生活者」である対象の暮らしを支えるためのチーム医療や、他職種連携の一員として役割を果たすこと等、看護の専門性の発揮が求められる。

2019年看護基礎教育検討会報告書においても教育の基本的な考え方として多職種協働の重要性について明記され、チーム医療を確立するためにも看護基礎教育にて取り組む重要性が強調されたといえる。本校でも、これら社会の変遷に対応し、看護師として必要となる能力を備えた質の高い看護師育成に向け、2年次に「他職種協働実習」を設けた。

本実習は、対象に関わる様々な職種の日常業務に触れることで、それぞれの役割の実際を捉え、互いの職業アイデンティティを尊重しながら、対象の最善の医療をめざし協働する力を養うことを目的としている。また他職種と協議の上、対象の求めるニーズを捉え、最善の医療提供に向かって医療チームの連携と協働を経験することで、改めて「看護師とは」「看護師に求められる役割とは」について考えることをねらいとしている。

実習初年度となる令和5年度では、課題として他職種（者）の見学がメインとなり実践が薄く、学生は受け身がちで、消極的な実習となってしまった。そのため令和6年度は実習を再考し、他職種（者）との協働が経験できる学習内容とし、さらに能動的な実習となるよう工夫した。

保健医療福祉に関わる専門職は、その立場は対等であり、互いにコミュニケーションを図り、より良い目標達成に向け協働する。しかし、専門性により問題のとらえ方や判断に相違があり、時に職種間での対立が起こることや、相手への遠慮等から発言や提案を諦め、専門性を発揮できにくい課題もある。

それぞれの職種の特性や役割を学び、その専門性を理解した上で、看護師として責任を自覚し、対等に、かつ円滑にコミュニケーションを促進する必要がある。そこで本実習を通して、連携協働のためにどのようなコミュニケーションスキルが必要なのか考える機会となるよう様々な他職種（者）との関わりをもつことも重要視した。さらに令和6年度の新たな取り組みとして、イムスグループの新入職者となる薬剤師、理学療法士などの協力を経て他職種連携場面を想定し、実践に活かす内容として模擬事例から実際にチームで対象の目標を設定し計画を実施した。

医療の質を保つためには、それぞれの職種のアイデンティティを理解し、受け入れ共有し、同じ目的に向かって取り組む力が必要である。教育機関と臨床が連携した教育によって、他の職種の理解から尊重する力、コミュニケーション能力、医療倫理の理解、実践力へと繋げていくことが重要であると考え。しかし協力医療機関の拡大や周知等の課題も見えてきた。シンポジウムでは現状から、臨床へつなぐための課題と展望について考える機会としたい。

多職種連携～看護基礎教育における教育の現状～

北里大学看護学部

准教授 田辺 幸子

北里大学は生命科学の総合大学として、9学部18学科（大学院7研究科1学府）及び併設2校（北里大学保健衛生専門学院、北里大学看護専門学校）を擁し、15職種に及ぶ専門医療人を育成しています。「地球の未来につながる教育・研究」をキーワードに、時代が求める学びの4本柱の一つにチーム医療教育を掲げ、専門職間の機能的連携により安全で良質な医療の実践者を目指した教育を提供しています。今回は2つのチーム医療教育プログラムを紹介します。

「オール北里チーム医療演習」は患者中心の質の高い医療の提供のためにチーム医療の構成員の専門性を理解し、自らの専門性をいかして多職種協働できるようになるためにチーム医療に関する基本的能力を修得することを目的としています。本プログラムは2006年度から行われ、2024年度は約1,000名が参加しました。15職種を目指す学生が相模原キャンパスに一堂に会し、異なる（将来の）職種で構成された10名程度のグループに分かれ、2日間にわたり事例検討、発表を行います。今年度は大災害時の医療、がん医療、術後感染症、慢性疾患患者の療育支援をテーマに現代医療の課題に対しチーム医療で何ができるかをディスカッションしました。

演習に対する総合評価は、＜満足＞＜まあ満足＞と回答した学生は全体で97.6%と高い満足度が得られました。多職種連携の課題についての自由記述では、「コミュニケーション」、「職種間の専門性の理解度」に関する記述が多くありました。また「時間とリソースの制約」についての記述も多数あり、チーム医療の理想と現実とのギャップについてすでに認識している学生がいることもうかがえました。本演習での経験が、将来、医療現場で実践する際により良いチーム医療の実現に役立つことを期待します。

「国際チーム医療演習」は世界各国の提携校の留学生との交流を通してグローバルな視点を養う5日間の演習プログラムです。2015年度に医療衛生学部が始めた取り組みを全医療系学部に発展させ、8回目となる2023年度は10か国（地域）11協定大学から27名の留学生を招へいし、医療系4学部の希望する学生が参加しました。目標は以下です。

1. 医療に関わる最前線の科学や技術について学びを深め、それぞれの国における価値観や倫理観についても深い理解を得る。
2. 異なる分野・言語・文化を持つ学生同士が、チームとして演習を行う上での工夫について経験し、卒後医療従事者としてチーム医療を実践していくためのスキル（カルチュラル・コンピテンシー）を身につける。

3. 国内外の様々な地域・情勢における医療・保健衛生現場へ貢献できるような学生、卒業生を育成・輩出する。

演習では、異なる国・職種で構成された8名程度のグループに分かれ、英語で事例検討、発表を行いました。この他にも基調講演、北里柴三郎記念博物館見学、観光や夕食の案内、各学部生の交流の機会も設けました。

演習を終えて、北里生からは「医療従事者として将来的に文化の背景が異なる患者さんに接することになれば、今回の経験を生かすことができる」という声が寄せられました。留学生からは「国によって異なる医療制度や職種で求められる役割の違いを確認出来ただけではなく、治療目標やその目標を達成するための多くのステップは似ているという共通点を見つけた」、「英語を母語としないチームメイトとコミュニケーションをとる際に、できる限り平易な表現で伝える能力が試され、それは専門用語を使わずに患者さんとコミュニケーションをとるための能力を磨くことに繋がった」等の気づきが共有されました。

2024年度からは北里生、留学生ともに1単位が付与されます。

神奈川県看護師等養成機関連絡協議会
Kanagawa Nursing School Association

第26回「神奈川県看護教育フォーラム」

テーマ：多職種連携 ～看護基礎教育から臨床への発展～

開催日時：2025年2月22日（土）13：30～16：30

開催会場：神奈川県立よこはま看護専門学校 講堂

《企画・運営》

神奈川県看護師等養成機関連絡協議会

担当理事	志村 央子	湘南平塚看護専門学校
部会長	加藤 エリ	神奈川県立よこはま看護専門学校
部会員	森屋 宏美	東海大学医学部看護学科
	佐藤真紀子	イムス横浜国際看護専門学校
	根本三枝子	相模原看護専門学校
	福井 里佳	慶応義塾大学看護医療学部看護学科
	栗原 弘子	小澤高等看護学院
	若林 和枝	関東学院大学看護学部
	中村 仁志	神奈川歯科大学短期大学看護学科

《協力》

株式会社さんこうどう

